

四月一日の朝。女は通勤のため駅に向かって歩いていった。すれ違う会社員には見慣れた人もいれば、きょうから通い始める人もいる。ふと見た先に新顔の男性がいる。すれ違うまでの時間が、ゆっくり流れ、対照的に鼓動が高鳴る。すれ違う瞬間、時間が止まったように感じた。スーツ姿の似合う年配の男性で、転勤してきたのかと勝手に想像した。毎日の通勤が楽しくなると女は内心微笑んだ。

翌日も同じ場所で二人はすれ違った。女はますますときめく。男は気づかないようだ。だが女は今のところは毎朝見かけるだけで充分と自分に言い聞かせている。

一か月過ぎ、土日祝日以外は同じ場所ですれ違い続けた。

ある日、すれ違う時に男が会釈した。女は喜んで会釈した。言葉は要らない。会釈だけで充分である。

毎朝の秘かな楽しみが一年続いたが、コロナ禍で女は在宅勤務になった。家でじっとしてられない女は駅まで散歩することにした。いつもの場所で男は少し驚いた顔をしながら会釈する。はにかみながら女も会釈する。駅で折り返すと笑顔で帰宅し、在宅勤務した。

一週間過ぎた月曜の朝、いつもの場所に男は居ない。通勤客も激減している。男も在宅勤務になったのだろうと想像して女は帰宅した。物足りない日々が続いた。それでも女は再会を夢見て通勤がわりに散歩するのであった。

六月第一月曜の朝、いつもの場所に男が来る。指二本立てて、何かの合図らしい。会釈すると「月水金」とささやく。週三日勤務になったららしい。女は「はい」と笑顔で答えた。週三回の楽しみが始まった。

七月になると、男は週五日勤務になった。女は相変わらず在宅勤務だったが、喜々として朝の散歩を続けていた。

翌年の三月末。男が深刻そうな顔で「四月から転勤になります。お会いできて楽しかったです」と挨拶する。突然の事に「私も楽しかったです」と答えるのがやっとなった。

四月になった。やはり男は来ない。女の落胆の吐息。と、その時、若い男が会釈しているのが見えた。驚いて若い男に会釈すると、見覚えのある社員章をしている。どうやら会社の後輩に託して転勤したらしい。

すれ違うまでの時間が、ゆっくり流れ、新たなときめきが始まる。